

市立函館博物館館報

1994. 3. 15

函館大火絵はがき



昭和9（1934）年3月21日午後6時53分頃、その日吹き荒れていた強風により屋根を飛ばされた函館市住吉町の民家から火災が発生しました。火災は懸命の消火活動にもかかわらず、瞬く間に広がっていました。翌朝午前6時に鎮火するまでの間、死者2,166名、重傷者2,318名、焼失面積416.39ヘクタールと、市内の約 $\frac{1}{3}$ を灰にした未曾有の大惨事となつたのです。この大火は後に「函館大火」と呼ばれ、函館市民にとって忘れることのできない事件として語り継がれています。

紹介する資料は、この大火直後に発行された絵はがきです。写真には、新川町電車通り付近の惨状が写されており、猛火に包まれて残骸となった電車と街の様子から火災の恐ろしさがよくわかる資料です。この絵はがきは7枚組で「函館大火焼失区域略図」1枚付で販売されました。この絵はがき以外にも数種類が販売されました。

函館大火から今年でちょうど60年、火災をはじめ、都市の防災について改めて考えて見ることが必要ではないでしょうか。

＜学芸員：尾崎 涉＞

平成5年度特別展

「新撰組の謎」報告

学芸員 野村 祐一

幕末、京都において活躍した新撰組は、現在でも高い人気を得ています。本年度、五稜郭分館において開催された特別展「新撰組の謎—土方歳三と箱館戦争—」は、この新撰組にスポットをあて、その誕生から解散までの軌跡を追いつつ、その謎のいくつかを紹介しました。

第1幕「動乱の時代に」では、新撰組の母体となった江戸多摩の道場天然理心流について、また、新撰組の中心人物である近藤勇、土方歳三などの遺品も展示しました。

第2幕「新撰組誕生」では、新撰組誕生までの経緯を、第3幕「恐怖の新撰組」では、彼らの京都での活躍を当時の記録や手紙などで紹介しました。

第4幕「流転」では、戊辰戦争の動乱の中各地で奮闘した新撰組を、隊長近藤勇が死に至るまでの経過を追うことにより紹介しました。

第5幕「土方歳三と箱館戦争」では、近藤亡きあと、新撰組の中心となった土方歳三の箱館戦争での活躍から最期までを、箱館戦争の経過とともに追っ

てみました。

今回の特別展は7月18日から9月26日までの約2ヵ月間に、約41,500人の観覧者を数え、中には、何度も来られた方もおりました。

また、7月18日には京都靈山歴史館木村幸比古氏による講演を、9月23日には天然理心流の方々による剣技を披露していただくなど、展示以外にも色々な催しを行い、市民や観光客のみなさんに好評を得ることができました。



観覧・展示風景

平成5年度特別企画展

「花光コレクション展」報告

学芸係長 岡田 一彦

花光春之助氏が亡くなつてから今年で13年となります。ご承知のとおり、花光氏は昭和41年の市立函館博物館本館開館の記念としてコレクションを一括寄贈された方です。このコレクションは、当館の美術工芸資料の基礎となりました。

当館では、このほか多くのコレクションを所蔵し

展示を観覧中の故花光春之助氏の
遺族の方

ており、これらは常設展示の中で少しづつ展示していますが、機会を見てコレクションごとの展示を順次するべきと考えておりました。今回はその最初であります。

花光コレクションは図書やその他を合わせて303点で、その内今回は223件（日本画48件、書15件、香合57件、陶磁器58件、その他の工芸品など37件）を本館第1・2展示室に展示しました。

会期は、平成5年5月2日から8月1日まで、この間5,296名の観覧者がありました。観光客の中には、函館という地方都市に「これだけの逸品が揃っているとは驚きました。」と、函館市が所蔵する資料の質と量から函館の文化の高さへの認識を改めた発言がありました。

これからも花光コレクションを逐次展示替えをして、常設展示の中で公開してゆきたいと考えております。

平成5年度企画展 「新収蔵資料展」 報告

学芸員 尾崎 渉

平成5年度企画展として平成5年8月15日～9月19日に開催した「新収蔵資料展」では、昨年度当館に寄贈された資料、購入した資料あわせて198件約270点を展示公開いたしました。

今回寄贈され展示した資料の特徴は、自然科学資料が92件95点と半数を占めており、そのほとんどが渡島支庁から一括寄贈された鳥類剥製資料である点でしょう。これらの剥製は、渡島支庁管内でケガをして保護され後に死亡した鳥等で、教材用として剥製にされたものです。当館の鳥類資料になかった種類も数多く含まれており、鳥類剥製資料が手に入りにくくなってきた現在では、まさに貴重な資料と言えるでしょう。

この他、明治～昭和初期に使われていた農機具等の民俗資料、昭和9年に発生した函館大火絵はがき等の歴史資料があり、どの資料も当館にとってひじょうに貴重な資料ばかりで、将来的に常設展示で活用し広く市民の方々に観覧していただければと考えております。

今回の展覧会では、自然系資料、人文系資料を合わせた展示を行いましたが、これが観覧された方から好評をいただき、このことは、今後の博物館の展示方法について、分野別展示からある程度脱皮する必要があるのではないかという考え方を得た展覧会となりました。



コサギ

平成5年度 教育普及事業「博物館講座」

学芸員 尾崎 渉

当館では、教育普及事業の一つとして「博物館講座」をその中心的な役割と位置づけ、今年度は21講座を開催しました。内容的に天体観測シリーズ、野外キャンプの親子自然体験教室など、体験型講座を16講座と例年以上に取り入れ、学芸員の一方通行的講座から受講者の方々が楽しく、自ら参加できるものとなっています。



遺跡発掘体験教室



親子自然体験教室で昆虫標本の作り方を学習する参加者

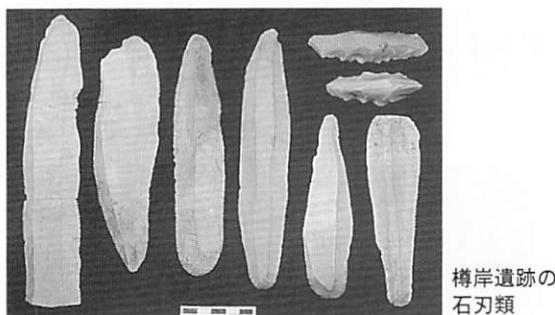
来年度は、学校教育週休2日制を踏まえ、博物館学芸員と参加者が一つのテーマについて一緒に調査・研究していくワークショップ型講座を中心に、さらに充実したプログラムを組んでいきたいと考えています。

研究と資料

北海道旧石器文化研究の原点:樽岸・立川遺跡の旧石器 — 学芸員 田原 良信

市立函館博物館所蔵の旧石器文化資料の中で、ここに紹介します樽岸遺跡および立川遺跡（第I～IV地点）の石器は、北海道における旧石器文化研究の原点とも言えるもので、シベリアから南下した北方系の旧石器文化が北海道にも存在したことを最初に確認できた画期的な資料となっています。

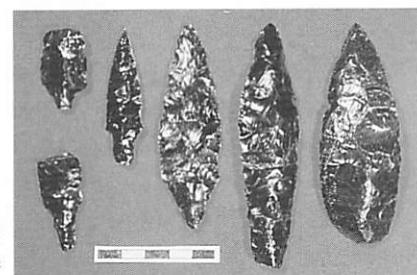
第二次世界大戦までの日本では、否定されていた土器を持たない旧石器文化が存在することが明らかとなつたのは、昭和24年群馬県岩宿遺跡の発掘調査によって、それまでは問題にされていなかった関東ローム層中から発見された石器がきっかけとなりました。これに続き、東京都や長野県でも同様な石器文化が発見され、日本列島の各地からも旧石器が発見される期待が高くなってきた昭和29年12月に、北海道における旧石器文化の最初の本格的発掘調査が行われることになります。この調査は、函館博物館に寄贈された石器に端を発して、後志管内黒松内町の樽岸遺跡において、岩宿遺跡の発掘調査を手がけた明治大学杉原壯介教授を始め、北海道大学河野広道教授・湊正雄教授など考古学・地質学の第一人者や函館博物館職員の参加のもとに行われました。



その結果、本州での場合と同様に1万年以上前と推定される「赤土」と呼ばれる地層から、総数72点に及ぶ頁岩(けつがん)製の石器や剥片類が発見され、北海道にも旧石器文化が存在することが裏付けられました。発見された石器類の内訳は、鹿角などをタガネに利用して石を剥ぎ取る「間接打法(Punch form butt)」により製作された、縦長剥片のBlade(石刃)やBlade-Core(石刃石核)、さらには、Bladeを加工したEnd-scraper(エンド・スクレイパー)、およびFabricater(舟形石器)、Flake-tool(剥片石器)、Flake(剥片)などです。これらは、シベリアが源流の石器文化と同様のもので、特に20cm以上に及ぶ定形的な剥片を連続的に造り出すBlade-technique(石刃技法)は、効

率よく石器の素材を大量生産する非常に高度な製作技術と言つてよいことがあります。この製作技術は、縄文文化以降では道東の石刃鍛文化など一部に残りますが、何故か発展することも広まるることもないまま、大半はあまり効率が良くない直接打撃による剥片生産の技術に移り変わって行くことになります。いずれにしても、北海道の旧石器文化研究の先駆けとして、樽岸遺跡の旧石器は学史上の意義が高く、昭和32年に北海道指定有形文化財となっています。

昭和30年以降、道内各地でも旧石器の発見が続く中、函館博物館主催のもと昭和33年11月、後志管内蘭越町立川遺跡の発掘調査が行われました。この遺



跡では、第I～IV地点の4箇所に分けて調査が行われた結果、旧石器文化の最終段階にあたる資料が多く採集され、縄文文化へ移行する直前の細石器文化のものであることが明らかになりました。出土した主な石器には、立川ポイントと名付けられたTanged-Point(有舌尖頭器)、Microblade-Core(細石刃核)、Microblade(細石刃)、Graver(彫刻刀)、Drill(石錐)、Knife(ナイフ形石器)、エンドスクレイパー、石刃、石刃石核など多様なあります。この中でも、有舌尖頭器は弓矢の発生を探る上で重要な存在と言え、細石器文化の最終で縄文文化に最も近い時期にあたるものと考えられています。また、細石刃核もオショロッコ型・峠下型・蘭越型など数種類のものがあり、さらには新潟県荒屋遺跡出土と類似する荒屋型彫刻刀も含まれるなど、シベリア源流の北方系旧石器文化の色々な様相が混在して残されていることが確かめられました。なお立川遺跡出土石器のうち、有舌尖頭器を含む一部のものは、昭和39年に函館市指定有形文化財となっています。

このように、北海道旧石器文化研究の黎明期に調査された樽岸・立川遺跡の資料は、最近でも各地の遺跡から発見される石器文化との比較をする上で標準的なものとして、改めて色々な視点からの見直しがされるようになってきています。

研究と資料

平成5年度特別展「新撰組の謎」余話 — 学芸係長 岡田 一彦 —

「新撰組の謎」展の開催に伴う調査結果を、展覧会の図録にも解説しましたが、いくつかを補足したいと思います。

★新撰組の「謎」について

今回出品された大阪府の所蔵する「新撰組判鑑」に「撰」を使用しています。関所という当時の公的機関のものなので、正式なものと判断し、今回の特別展の文字は「撰」を使用しました。

一方、他の資料や現在発刊されている出版物にも「選」が多く、各々根拠を示しているものもあり、公文書でも誤りがあるということも考えれば「選」も捨と切れません。しかし当分、信憑性の高い資料が見つかるまでは、「撰」を使いたいと思っています。

★局中法度について

局中法度は新撰組の行動に大きな説得力を持っています。しかし、文献には出てきますが、実物に関しての記載はありません。

現在、新撰組についての研究や小説などは、子母沢寛の「新撰組始末記」を土台にしているものが多いようです。

靈山歴史館の木村幸比古主任学芸員のお話によると、存在しないとのことで、子母沢寛もフィクションであると話したといいます。子母沢寛は新聞記者時代に、新撰組ゆかりの人々から多くの聞き取りをし、その後も綿密な資料調査・現地調査をして刊行したとされ、一部の歴史家には評価されていました。

図書館によっては「新撰組始末記」を、文学ではなく歴史に分類しているところがあります。

★土方歳三最後の地について

昨年発行された「NHK歴史発見2」の「土方歳三さまよえる墓標」で、作家早乙女貢氏の一本木での味方狙撃説に興味を持ちました。

土方歳三は一本木で指揮しており、その時は一本木から離れた所が戦場になっていたのだから弾は届きません。その上すでに敗戦が明らかになっていて降伏を協議している中で、土方歳三は幹部の中でも徹底抗戦派で孤立していたといいます。

陸上自衛隊函館駐屯部隊広報課によると銃砲の弾は離れるに従って破壊力が少なくなるといいます。

即死説から近くで撃たれたものと考えると説明ができます。早乙女氏は、大島圭介が命じたと推測しています。

一方「退く者は斬る」と後ろから叱咤された兵の一人が、前面に敵兵が進撃してくるのを見て、恐怖感から咄嗟に撃ってしまったとも推理できます。

反面、当時有効射程距離で1キロメートルを大幅に越える銃は、ウイルソン（Wilson）1,137メートル、マンソー（Manceaur）1,200メートル、レミントン（Remington）1,365メートルなどがあります。

特にレミントンは新政府軍が多量に購入したといわれ、戦場は混戦状態でしょうから、狙撃または流れ弾に当たっても不思議ではありません。

新政府軍がどこまで一本木に近づいていたか、戦いの推移を再検証してみたいと思っています。

また、即死であったか否かも明確ではないので、弾の当った場所が最期の場所とするのも疑問です。

★土方歳三の埋葬場所について

埋葬場所について最近、柏倉清氏が「それからの土方歳三」で大円寺説を掲げました。以前からもあった話ですが、このたびの特別展の調査の一環として柏倉氏に会って確認を得たかったのですが、本人の所在が掴めませんでした。この出版物は小説的に書いてはいますが、わざわざ「土方歳三の馬方吉田松四郎の覚書」というものを掲載しています。これもフィクションだという話が伝わってきました。

「土方歳三の最期」（加瀬谷 直著）には、柳川熊吉から聞いた話として孫の徳蔵氏が「土方歳三氏の遺体が、土葬から火葬にされて碧血碑下（碑下と言っても碑後の大きな石の下らしい由）に埋葬されたという話を聞いたことがあります」と昭和55年6月の筆者あての私信に書いてあるそうです。

これはこの石を動かして見なければ判らないでしょう。100年以上前の骨が骨壺の中にいるなら残っている可能性もありますが、誰の骨か判るでしょうか。それにしても調査が必要です。



近藤勇着
(小島資料館蔵)

蔵品目録7 考古資料篇の発行

函館博物館に収蔵されている考古資料は、明治12年開館の函館仮博物場当時から、ごく最近の発掘調査によるものまで、数多くのものがあります。

この中から、明治・大正から昭和23年までに函館図書館に寄贈され、博物館に移管となった旧蔵資料や、昭和24年のサイベ沢遺跡・昭和25年の住吉町遺跡を始めとする昭和46年度までの発掘調査資料、さらに個人の方々からなどの寄贈資料を対象として、

この度平成6年3月までの収蔵目録として刊行する運びとなりました。対象となる資料は、旧石器時代から中世の室町時代にわたる土器・石器・土製品・石製品・古銭等の金属製品などで、中には北海道指定有形文化財5件、函館市指定有形文化財3件が含まれています。なお、昭和47年度以降の収蔵資料については、大規模発掘調査などによりそれまでの数倍以上にも及ぶ量となつたために、今後機会を改めて第2期分として刊行する予定となっています。

〈学芸員：田原 良信〉

平成5年度新収蔵資料紹介

○寄贈資料

- 北洋漁業（油彩画） 1件
【四津 庄一氏寄贈・函館市青柳町25-3】
- 切 溜 他 5件（14点）
 - 【滝野 清治氏寄贈・函館市弥生町3-1】
 - ひな人形絵 1件（2点）
 - 【飯島 玲子氏寄贈・函館市谷地頭町8-12
谷地頭保育園】
 - 雪下駄 他 27件（34点）
 - 【塚本エミ子氏寄贈・函館市柏木町24-9】
 - 写 真 他 8件（8点）
 - 【梅川一大志氏寄贈・函館市大手町6-8-208】
 - 唐 箕 他 12件（12点）
 - 【近藤 政吉氏寄贈・函館市富岡1-20-14】
 - 角 卷 他 3件（3点）
 - 【計良 芳枝氏寄贈・函館市本町21-6】
 - 婦人用着物 他 3件（3点）
 - 【小川 武義氏寄贈・函館市千代台町19-11】
 - 鋸 他 16件（18点）
 - 【浜島国四郎氏寄贈・函館市柏木町40-12】
 - ウ ソ 他 84件（86点）
 - 【渡島支庁寄贈・函館市五稜郭町26-8】
 - ツノメドリ 他 4件（4点）
 - 【北海道大学水産学部助教授 小城 春雄氏寄贈
・函館市港町3-1-1】
 - ストーブ 1件
 - 【日角 善作氏寄贈・函館市船見町13-5】
 - マキリ鞘 他 2件（2点）
 - 【中田 勇氏寄贈・函館市根崎町34-2】
 - 角 卷 1件
 - 【岡田 安子氏寄贈・函館市中島町38-1-503】
 - 蟹工船模型 1件
 - 【伊藤 栄一氏寄贈・函館市弁天町19-4】

- 竿ばかり 2件（3点）

【小川 健治氏寄贈・函館市追分町4-6】

- アカウミガメ 1件

【佐藤 敬氏寄贈・函館市中道1-21-19】

- 和箪笥 1件

【小室 耕児氏寄贈・函館市東川町23-6】

- ひな人形 他 41件（196点）

【五十嵐幹子氏寄贈・函館市花園町10-24】

- オオコノハズク 他 10件（10点）

【渡島支庁寄贈・函館市五稜郭町26-8】

- 邦文タイプライター 1件

【函館市立西中学校寄贈・函館市弥生町11-16】

- ウミマツ 1件

【川村一二三氏寄贈・函館市田家町11-2-303】

- 測量器械（トランシット） 1件

【能代 正信氏寄贈・函館市神山3-31-13】

○購入資料

- 函館公園全図 1件

- 南部藩安政2年蝦夷地警衛図 1件

- 梅 図 1件

職員の異動紹介

遠藤清管理係長南北海道教育センターへ異動（4月16日付）

近江幸一管理係長発令（4月16日付）

長谷川寿雄博物館主査発令（4月16日付）

福田隆一主任発令（5月1日付）

野村祐一学芸員発令（5月1日付）

今井文委子臨時職員採用（4月1日付）

Hakodate City Museum News

SARANIP —サラニップ— No.33 1994. 3. 15発行

編集・発行 市立函館博物館 (TEL 0138-23-5480)

北海道函館市青柳町17-1・函館公園内 (〒040)